

図書館友の会は、詩・短歌・俳句・文章・岸和田再発見の各教室を開いています。その中の「詩の教室」と「文章教室」では、倉橋健一先生に参加者への助言・指導をいただいています。倉橋先生にも『図書館から岸和田ルネサンス』の取組みへの協力をお願いしたところ、「それは大変いいことだ」と励ましていただき、文学者としての立場から寄稿してくれましたので、紹介します。

今、読んでみたい お薦めの本

詩人 倉橋 健一

「ルネサンス」とは、もともとはフランス語の「再生」という意味です。コロナ騒ぎに巻き込まれて、図書館も3カ月近く休館に近い状況に追い込まれるなど、とぼっちりを受けました。逆にそれを機会にして、「図書館友の会」では「図書館の本来の特性や役割」について、いろいろ考え直すきっかけにしようとするあたり、「ルネサンス」にばっちり。なかなか面白い企画です。

そんななかで一般の市民に公開される公共図書館、コロナ禍がなくても、近年の生活スタイルの変化も手伝って、とくに若い世代に活字離れが進行して、本来の**読む**という習性が薄らいでいるようです。おまけに今ではどんな本でも比較的簡単に手に入れやすくなったために、借りて返すという手順すら面倒くさがる人も増えているようです。



「読む」楽しさを知ることが、文化水準のバロメーター

でもここは、私たちは原点にかえて考えるべきでしょう。たとえば**読む**という動詞について。今日のように全市民的規模で昔からあったのでしょうか。ありませんでした。**読む**という文化行為が誰の目にもめずらしくなくなったのは、明治に入って義務教育制度が施行されて、この国では**文盲**がいなくなっただけからでした。つまり市民社会の発達の賜物でした。事実、日本にはじめて公開図書館ができたのは明治5年。くしくも全国民に教育がゆきわたるための学制公布と同じ年でした。いらい、日本は、**文盲**のいない点では世界屈指

の国になりました。つまり、逆に言えば、読む行為の楽しさを知っている点、それ自体がそのまま文化水準のバロメーターになっているということです。

時代の中で、リアルタイムで映し出すのが「文学」

そこで、もうひとつ、私は文学が専門ですから、話をそちらに移しますが、毎年夏になると、近年とくに今次世界大戦における沖縄地上戦や原爆による被爆体験をめぐって、体験の語り部たちの高齢化が、テレビや新聞の話題になります。同時に若い世代の戦争時に対する関心の希薄さが問題になります。あたりまえでしょう。戦後75年もたっているのですから。

これを近代史に置きかえると、戊辰戦争、江戸開城、奥羽諸藩の抵抗から明治新政府への年のことを、昭和15年から振り返るということですから、それを経験として感知すると言ってもそれは無理でしょう。

実際は、そこを時代の中であってリアルタイムで映し出しているものこそは文学、とくに小説なのです。たとえば、ヒロシマの原爆投下直後のいちばん爆心地に近いところを最も重々しくりあるにとらえているのは原民喜の『夏の花』という小説です。彼はたまたま厠（トイレ）にいたため命びろいをし、逃げまどうなか、作家の本能と雑嚢の中に入れていたノートに刻々と記録したのでした。それが貴重な『夏の花』になりました。

その意味では、先の読むという行為にもどりますが、私たち人類が文字をもったこと、さらに印刷術を知ることによって活字になり、広く分布したり保存が可能になったことに、あらためて思いを馳せてよいと思います。

おかげで千年前に書かれた『源氏物語』でも手にすることができ、紫式部と直接つながることができるからです。つまり、私たち一人ひとりには生命の限界がありますが、文字はそれをこえて永久に生きることを可能としました。歴史はあとの人が過去を研究して知る世界ですが、文字によって表現された世界はその折々のままで未来に残されました。

平安末期の災害や疫病など、リアルに描かれた『方丈記』

その一点からここでは、コロナ禍のなかで読んで興味深い古典として『方丈記』1冊をあげておきます。400字詰め原稿用紙30枚ほどの短い随筆集ですが、そこに平安末期の大火、大風、遷都、飢饉、地震、疫病など、実にリアルに詳しく描写されており、想像力の豊かな人なら、当時の民衆の苦労が手にとるように感じとることができるからです。

1960年代終わり頃、堀田善衛は『「方丈記」私記』という、終戦まぎわの東京大空襲の中で思わず頭をよぎったことに始まるすぐれた『方丈記』ノートを発表しました。私はこの本から逆に『方丈記』がすごいことを教えられました。こちらもお薦め本です。

そう言えば、有吉佐和子が、老いを永生きすることは幸福かという問いかけのもと『恍惚の人』を書いた頃、今の高齢者社会を意識した人はほとんどありませんでした。そう思って読んでいただくと、改めてその価値に気づかされます。

『陽だまりの樹』もおすすめの本です

堅苦しい本ばかりと思われた方のために、コロナ禍の中であってこそ面白い長編漫画を最後に紹介しておきましょう。

手塚治虫の『陽だまりの樹』です。1981年から『ビッグコミック』に連載がはじまり、9年後60歳で手塚治虫は亡くなりましたが、この長編漫画は手塚治虫の曾祖父だった幕末の蘭方医手塚良仙が主人公のいわゆる歴史漫画。ここでは種痘のすすめから、幕末期コロリとよばれた疫病コレラとたたかう様子など克明に描かれています。

私は、コロナ騒ぎの中に興味深い本と聞かされると、カミュの『ペスト』と共にこの『陽だまりの樹』8巻（小学館文庫）をおすすめしています。いかがですか。

私の新型コロナウイルス雑観

図書館友の会 松谷 敬一

全世界が新型コロナウイルスに襲われ、感染者数と死者数が日々増加の一途を辿っている今、人間社会の脆さとその驚きについて、思いつくままに書いてみました。

昨年12月、中国武漢で発症したウイルスの隠蔽から始まり、2月～3月にかけてヨーロッパに蔓延し、対岸の火事とみていたアメリカが感染者・死者数共に最大の被害国となるまで、三月とかかりませんでした。

マスコミや新聞では毎日一面扱いで大きく報道され、恐ろしい医療現場の現状や、各国指導者の後手々々のむなしい対策現場を映し出しているのを見て、世界の覇権競争を生み出す戦争や核開発競争がちっぽけな存在に見えることを思い知らされました。目に見える恐怖から目に見えない恐怖へ・・・グローバル経済から 隔離社会への移行・・・生物兵器を駆使しての世界制覇の企み等々色々な想像を掻き立てます。

いずれはワクチンの開発などで鎮静化するでしょうが、それまでの期間によっては医療の崩壊、各種産業の崩壊、経済の崩壊が国民の家庭崩壊へ等々・・・想像を絶する影響の広がり招くのではないかと思われてなりません。

4月から5月にかけて日本では、安倍首相の緊急事態宣言が発出と同時に国民全体が自粛生活を強いられ全都道府県の往来も止められました。

しかし6月に入って緊急事態宣言が解除となり、各都道府県の往来や学生の通学と各企業の通勤が可能となり、経済活動も緩やかに始動しだしています。

ウイルス感染で甚大な被害にあった米欧や新興国も徐々に経済活動に入りかけていますが、二次感染・三次感染の恐怖を抱えたままのスタートなので楽観は禁物です。またウイルス賠償責任問題で中国を取り巻く各国の政治問題の行方も気掛かりです。

一方で私たちの生活に目を向けてみますと、手洗い・マスク着用・人混みに注意など三密の習慣が定着した上に、ソーシャルディスタンスという2メートル四方の間隔保持を要求されますと、ボランティア活動や趣味の会など親密に集まってする団体行動の運営が難しくなってきます。

私は5つのボランティア活動で運営に関わっていますが、社会全体が活動自粛一色に覆われている中ですべての活動を休止したために、四か月の自粛期間を与えて戴きました。月曜から土曜日までギッシリ詰まったスケジュールが一気に空白になった気分は、ハトが豆鉄砲を食らった絵に似ています。

そこでいずれ読もうとためていた書籍を引っ張り出し、片っ端から読み始めました。正に読書三昧の醍醐味です。しかし静と動のバランスを欠くと健康に差しさわりのあるので、一日一万歩（約二時間）を心掛けての毎日です。

鬱々とした心境をなだめてくれた『回天の門』（藤沢周平作）

その中で楽しい本、爽快な本、情に訴える本など夢中になって読書鑑賞していると、ある一冊の本が現在の鬱々とした心境をなだめてくれることに気付かされたのでご紹介します。

それは34年前に、文春文庫から出版された藤沢周平作『回天の門』です。

最上川が断崖の間を潜り抜けた庄内平野の清川村で作り酒屋の跡取りとして生まれ、有り余る才能を持て余していた人物、それが主人公＝清河八郎である。

18歳で江戸に出奔し、学問を深めて儒者を目指す傍ら、千葉道場で剣道に精通しいろいろな同志と交わり、尊王攘夷の仲間づくりに取り組んでゆきます。やがて虎尾の会の盟主となり、皇室の信任を得て一気に討幕の動きを加速させてゆきます。

時あたかもペリー提督率いる黒船が開国を訴えて以来、次々と外国船が江戸幕府を揺さぶり、幕藩体制に異を唱える吉田松陰ほか優秀な開国主義者を捕らえて獄門に入れる安政の大獄が強烈に行われます。

しかし、その中心人物井伊直弼大老が江戸城に登場する桜田門外で水戸浪士の一団に襲われ打ち死します。それが幕府の衰退の契機となり、薩摩藩、長州藩、坂本竜馬、勝海舟などが力を合わせ江戸無血開城に向かってゆくその数年前に、討幕挙兵の先兵にならんと強引に計画実行の直前、幕府の手が回り暗殺されます。

時代が大きく変わろうとする予兆を読み、幕府・皇室に手を回し、仲間を募ってゆく手順に胆力と想像力はあったが、その時代の流れを読み間違え、同志の広がり待ちきれなかった性急な行動力と、傲慢な性格が彼の独り相撲となって、倒幕の機いまだ熟さずの気運の中で人生を閉ざすところが惜しまれてならない。

読後感としては、早すぎた志士として生きねばならなかった点に同情と、痛快かつ潔さを感じられ、もう少し我慢強く仲間の糾合に時間をかけていたなら、歴史上に名を残す存在になっていたかもしれないと思った次第です。

コロナ禍で次の時代が見通せないまま自粛生活を余儀なくされている現在の私たちには、時代に先駆けて切り開こうとする突出した能力と行動力を、今の時代を率いる指導者に思い描いて、一服の清涼剤を得た心境になりました。

発行 2020. 8. 7.